

学位論文要旨

中国における大学生の就職意識に関する
教育社会学的研究

高 静

広島大学大学院教育学研究科

教育人間科学専攻

D116399

2014年1月25日

I. 論文題目

中国における大学生の就職意識に関する教育社会学的研究

II. 論文構成

序章 研究の目的

- 第1節 問題の所在
- 第2節 先行研究の検討
- 第3節 本研究の課題

第1章 大学生の就職と就職意識の問題

- 第1節 大卒者の労働市場
- 第2節 大学生の就職事情
- 第3節 大学生の就職意識の問題

第2章 地方における大学生の就職

- 第1節 地方における大学生の就職意識
- 第2節 調査地山東省の概要

第3章 研究の枠組みと方法

- 第1節 調査の概要
- 第2節 本研究における「家庭背景」
- 第3節 大学生の就職意識の概観

第4章 就職意識の構造と規定要因

- 第1節 就職意識の構造
- 第2節 「語り」からみる就職意識の規定要因
- 第3節 家庭背景の影響
- 第4節 まとめと考察

第5章 就職意識が大学生活に与える影響

- 第1節 大学生活の概観
- 第2節 学習生活への影響
- 第3節 大学生活の規定要因
- 第4節 まとめと考察

第6章 地方大学における職業生涯教育

- 第1節 職業生涯教育の導入
- 第2節 職業生涯教育の実態
- 第3節 職業生涯教育に対する評価と課題
- 第4節 まとめと考察

終章 地方大学における就職意識のゆくえ

Ⅲ. 論文要旨

序章 研究の目的

本研究の目的は、中国の地方都市における大学生の就職意識がいかに関係形成され、またそれがいかに大学生生活に影響を与えているのかを検討することにある。その際、就職意識を、就職に対する希望や価値志向、また自らを取り巻く就職状況に対する認識および就職への態度など、就職に関わる個人の考え方や認識として広義にとらえる。

現在、中国では大学生の就職意識が社会の注目を集め、大きな研究課題として取り上げられている。その多くは大学生の就職意識を社会問題の一つとして批判し、意識の「転換」を呼びかけるものである。

中国で大学生の就職意識が問題とされているのは、就職難問題との関連からであった。大卒者の就職難問題が深刻化する中、「待遇の良い」都市部、または国有セクターにこだわり、内陸や農村地域、中小民营企业に就職したがる大学生が依然として数多く存在していることが指摘されている（張・劉 2006 など）。そのような「エリート的」就職意識は「高望み」や「現実離れ」と批判され、就職難を生み出す要因とされてきた（趙 2010 など）。そのため、政府、研究者、またはマスコミはこうした大学生の就職意識を大きな問題としてとらえている。

しかし、中国の就職意識研究の主流をなすこれらの先行研究は大学生の就職意識の「不適切さ」を非難しているに過ぎない。加えて、その「不適切さ」が実際に就職の結果に対してマイナスの影響を及ぼしているという実証的な資料をあげているわけでもない。つまり、社会構造や経済問題という側面を有する大学生の就職難（李 2011）を、大学生自身の問題として一方的に語り、構築しているのである。就職意識を問題とするのであれば、むしろなぜそうした就職意識が形成されるのか、あるいは就職意識が大学生の学習行動や大学生生活、また実際の就職行動といかに関連しているのかが検討されなければならない。

本研究では中国の地方における大学生を対象とし、その就職意識を明らかにするとともに、その規定要因、および大学生生活との関連を検討する。本研究の課題としては次の3点があげられよう。

第1に、中国の地方における大学生の就職意識の実態、および構造について検証する。大学生の職業や進路の希望、および就職事情に対する認識などに焦点を当て、質問紙調査を通してその実態と構造を明らかにする。

第2に、中国の地方における大学生の就職意識とその大学生生活がどのような関連を持っているかについて検討する。すなわち、上と同様の質問紙調査により、大学生生活の規定要因から、就職意識の大学生生活への影響について検討する。

第3に、中国でのキャリア教育とも言える「職業生涯教育」の実態を明らかにし、その大学生の就職意識との関連を質問紙とインタビューによって検討し、その課題を提示する。

第1章 大学生の就職と就職意識の問題

本章では、中国の大学生の就職事情を整理し、就職意識の問題が提出された経緯を考察した。その上で、本研究の課題を明らかにした。

大学生の就職意識の問題に対する指摘は中国の大学生バッシングとも言える現象を引き起こし、就職難問題を大学生のみの責任に帰した。就職意識の問題として、おもに大学生の就職への期待が高すぎるのが指摘されている。大学生が大手（おもに国有セクターなど）企業や大都市、高収入などにこだわり過ぎることが就職難をもたらしていると語られてきた（楊・鄭 2003 など）。また、そのような就職意識「問題」が生成した原因として、高等教育のエリート段階からマス段階への移行、いわゆる高等教育の大衆化に大学生が適応できていないことが指摘されている。つ

まり、大学生が「エリートから一般の労働者になった」にもかかわらず、「エリート意識」を捨てられないでいるとされる（朱・黄 2006 など）。そのため、大学生の高い就職期待は同時に「自己の過剰評価」として解釈され、大学生の自己認識の不足や曖昧なキャリアビジョンの問題に拡大されていった。さらに、キャリアビジョンが曖昧であることは大学での学習の動機づけを妨げ、大学生の学習に対する消極的態度をもたらしたとされる（朱・黄 2006, 冯・張・葛 2010 など）。このように、中国の大卒就職難は大学生の責任に帰され、大学生の就職意識の修正が求められるようになった。しかし、大学生の就職意識に対する以上の先行研究では、実証的な資料をあげた検討がほとんどなされていない。そのため、大学生の就職意識の問題、およびその学習行動への影響について、実証的な分析による再検討が必要である。

第2章 地方における大学生の就職

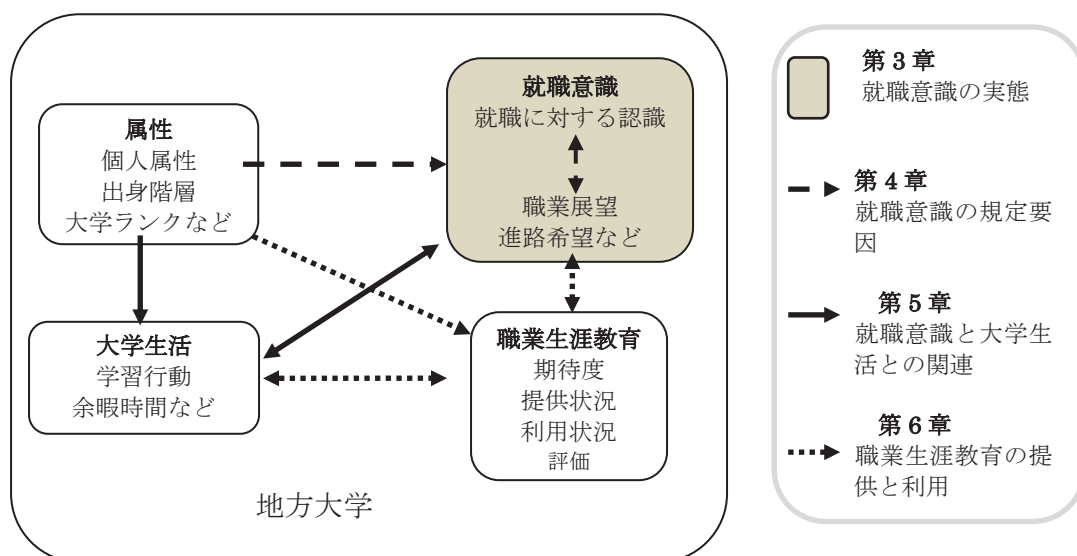
本章では、地方における大学生の就職意識問題について考察したうえで、本研究の調査地である山東省の概要を検討した。

大学生の就職意識問題において、先行研究ではとりわけ地方の大学生に言及されてきた。つまり、大都市での就職へのこだわりなどの「問題」は「地方」出身の大学生に多く見られることが指摘されてきた（黄・夏 2005 など）。しかし、先行研究の多くは大都市に進学した学生に対する調査であり、問題とされてきたのは大都市の大学に在学する地方出身者であった。一方、地方大学の学生と大都市の地方出身の大学生の就職意識は大きく異なっていることが、いくつかの調査により指摘されている（李 2011, 劉 2011）。したがって、地方大学の学生に着目することで、これまで大都市の実態から語られ、構築されてきた学生像を修正することが可能となろう。さらに、そのことにより、多様な大学生像に配慮したうえで大学における就職指導に新たな示唆を与えることができるだろう。そこで、本研究では、地方である山東省の大学生を調査の対象とした。

第3章 研究の枠組みと方法

本章では、就職意識を分析する際の枠組みとそれに応じた調査の概要を提示し、地方における大学生の就職意識の実態を概観した。

本研究の分析枠組みは下図に示すように、4段階からなる。



上図に提示した研究枠組みに沿って、筆者が中国の山東省で行った大学生の就職意識調査をも

とに分析を行った。

本研究ではアンケート調査およびインタビュー調査の2つの調査結果を用いている。2つの調査はともに3つの総合大学に協力を依頼した。対象とした大学の全国での順位は、それぞれ16位、142位と210位¹であり、国立、省立と市立という階層的構造になっている。また、大学所在地は、それぞれ省庁所在地、沿岸都市と農村に囲まれる小都市である。3大学のこれらの特徴は、その学生文化、とりわけ就職意識と大学生活に影響を与えようと考えられよう。

アンケート調査は2011年9月に、これら3つの総合大学の3、4年生、計1000名を対象に行ったものである。回収率は77.1%であり、有効回答数は771件であった。調査項目として、就職意識と大学生活、および大学でのキャリアサポートである職業生涯教育という大きく3つの領域を設定した。そのうち、就職意識は次の4つの面からとらえようとした。それは、1) 就職するために必要な要素に対する社会認識と就職に必要な要素をどの程度備えているかという自己評価、2) 職業の選択基準や就職地の希望など職業希望を含めた進路希望、3) 就職または職業キャリアに対する価値観、4) 就職をめぐる自分の状況に対する認識であった。大学生活については、大学および専攻の志望動機、学習行動および生活全般について質問した。また、職業生涯教育については、大学の実施状況、大学生の期待度、利用状況および効用について尋ねた。

質問紙調査に加えて、2013年の2月から3月の間に、インタビュー調査を行った。インタビュー調査は就職支援に携わる教職員6名および大学3、4年生7名を対象とし、おもに大学生の就職事情と大学による職業生涯教育の実態について質問した。

地方の大学生の就職意識に対する単純集計から、従来指摘されてきた大学生の就職意識問題と異なる結果が得られた。地方における大学生は大都市や大手への就職より、職場の福利厚生と将来性、職場環境を重視していること、また、堅実な就職意識の一方、高い転職志向が指摘された。

第4章 就職意識の構造と規定要因

第4章では、地方における大学生の就職意識の規定要因に関して考察を行った。その結果、大学生の就職意識の問題は「高望み」などのように短絡的、一元的に捉えられるものではないことが明らかにされた。つまり、もっとも影響を与えるのは「縁故」であり、それを持っていると考えている大学生は就職期待が高く、リスクを恐れず就職しようとし、その一方で、「縁故」を持っていないと考えている大学生は安定した職場を志向していた。

中国における「縁故」について、園田は「中国の場合、個人のもつ政治的な動員力もさることながら、特定の人物との人間関係が、階層的な位置づけにとって決定的な要因となっている」（園田 2001, p.18）と述べ、個人のキャリアに対する影響力が大きいことを示している。したがって、大学生の就職意識の検討において、「縁故」による影響が考慮されなければならない。本研究は園田（2001）の論述に基づき、中国における「縁故」を「特定の人物との人間関係」と「個人のもつ政治的動員力」という2つの形態から捉え、「(就職に有利な) コネを持っている」と「(就職において) 有力な家庭背景を持っている」という2つの変数を用いて「縁故」を大学生の主観的判断によって測定することにした。分析の結果の一部を表1に示す。

中国における「縁故」は就職意識に大きな影響を与えていることが明らかになった。「縁故」を持つと考えている大学生は大手や大都市での就職を志向し、適職にこだわるなど高い就職期待を示しているだけでなく、転職や農村での就職などにも否定的ではない。それに対して、「縁故」を持たないと考えている大学生は転職や農村での就職を望まず、大手に就職することよりも職場の安定性や機会の平等などを重視している。つまり、「縁故」を持つと考えている大学生は就職にお

¹ 2011年、中国校友会が「科学研究」「人材育成」「総合評価」を基準として作成したランキングに依拠する。
<http://www.gaokao.com/e/20110118/4d34ffccbcf15.shtml> (2012年6月20日アクセス)

けるリスクを無理に回避せず、さまざまな進路を考えに入れた上で転職を通じて適職を求めようとするという大胆かつ自由な就職態度を示しているのに対して、そうでない大学生は安定した職場を求めようとする穏当な態度を示している。このような違いは、「戸籍」などによって分断化された中国の労働市場では、「縁故」を持つ者は社会的な制約にそれほど縛られないために生じたと考えられる。つまり、就職機会を増加させる縁故は、大学生の就職意識に余裕を持たせているのである。なお、このような就職意識の違いは親の職業や収入、学歴などの指標では限定的にしか見られなかった。

表1 縁故と「就職先を決める際に何を重視するか」との関係

	コネを持っている			有力な「家庭背景」を持っている			
	あてはまる	あてはまらない			あてはまる	あてはまらない	
転職がない	3.65	3.35	**	転職がない	4.25	3.28	**
仕事内容が楽	3.68	3.41	*	仕事内容が楽	4.04	3.38	**
職場に知人いる	4.02	3.66	**	職場に知人いる	3.98	3.70	**
職場が大都市にある	3.69	3.23	**	職場が大都市にある	3.84	3.27	**
規模が大きい	3.88	3.54	**	規模が大きい	4.03	3.58	**
知名度が高い	3.95	3.49	**	知名度が高い	4.04	3.57	**
国内出張が多い	3.50	3.10	**	国内出張が多い	3.81	3.10	**
社会的地位が高い	3.94	3.58	**	社会的地位が高い	3.98	3.64	*
国への奉仕ができる	3.77	3.54	*	国への奉仕ができる	3.91	3.60	*
戸籍転入の保障がある	3.96	3.70	*	実家に近い	3.99	3.42	**
収入が高い	4.29	4.12	*	社内競争が激しくない	3.69	3.32	**
現代的な経営理念が備えている	4.25	4.04	*	保険制度が整っている	4.19	4.50	**
国外出張が多い	4.10	3.88	*	職場は将来性がある	4.19	4.43	*
多様な職種を体験できる	3.97	3.75	*	専門領域を生かせる	4.08	3.82	*
				機会が平等である	4.19	4.40	*

p < 0.01 は*, p < 0.001 は**として示す。以下同様。

※この表は「就職先を決める際に何を重視するか」を5段階で聞き、それを「とても重視している」を5、「全く重視していない」を1として算出した平均値を「縁故」別に示したものである。網掛け部分は両指標で同様の傾向を示す項目である。

また、「縁故」のほかに、大学ランクや専攻などが労働市場で与える効果も、大学生の就職意識に反映されている。ランクの高い大学の学生は卒業後すぐに就職することを志望し、高い就職期待を示している。その一方で、ランクの低い大学の学生は卒業後すぐに就職するよりもランクの高い大学院への進学をめざし、いわば敗者復活を図っている。このような就職意識の違いは、求人側が採用の際、学歴を重視していることを反映していると考えられる。

以上のように、大学ランクや「縁故」などの影響から、労働市場における学歴重視や縁故就職などが大学生の就職意識に違いをもたらしていることが明らかになった。とくに本研究では、「縁故」に着目したことで、親の職業、学歴および収入など、社会階層を示すほかの指標による分析の限界を指摘した。先行研究では社会階層の影響は弱く、大卒就職における個人の能力の効果が強調されることもあった(岳・文・丁 2004 など)。しかし、本研究が明らかにしたように、中国の大学生の就職意識を検討する際には、「縁故」の影響を重視する必要がある。

第5章 就職意識が大学生活に与える影響

本章では、上述した大学生の就職意識が大学生活にどのような影響を与えているのかについて分析を行った。その結果、大学生の明確な進路希望は必ずしも積極的な学習行動に結びついておらず、むしろ学習の軽視をもたらしていることが明らかにされた。

先に指摘したように、これまで進路希望が曖昧なことは大学生の学習を阻害するとされてきた。しかし、実際には希望する進路が決まっている大学生は、消極的に学習に取り組んでいた。つまり、曖昧な進路希望や就職意識は必ずしも大学生の学習に支障をきたしているわけではない。進路希望が明確な大学生は、就職や進学への準備に応じた学習をしているがゆえに、大学での学習を

軽視すると考えられる。分析結果の一部を表 2 に示す。

逆に、進路希望が曖昧な大学生は学習に積極的に取り組んできた。しかし、こうした学生は学習に積極的であるものの、学習を苦痛だと考え、学習の意味を疑っている。つまり、自分に必要な知識や技術が明確でないがゆえに、大学から提供される学習を受け入れざるを得ない。したがって、こうした大学生の学習は自主的なものではなく、いわば強い「学校化」によるものだと考えられよう。

表 2 「卒業後の進路希望を決めている」と学習行動との関連

	あてはまる	あてはまらない	
よく予習・復習する	2.94	3.22	*
よく勉強について討論する	2.78	3.04	*
専攻関連の本よく読む	3.17	3.46	*
必要ない授業を受けないようにしている	2.57	3.16	**
資格を取るために勉強することが多い	3.09	3.46	**
授業の出席を苦痛に感じるが多い	2.53	3.11	**
積極的に教養科目に出席する	3.32	3.54	
興味のある科目がある	3.88	3.85	
自分が成績のいいほうだと思う	3.14	3.30	
大学における勉強に意味が見出せない	3.00	3.50	**
授業以外の学習時間	4.03	3.68	*

※この表は大学生の学習行動を 5 段階で聞き、それを「とてもあてはまる」を 5、「全くあてはまらない」を 1 として算出した平均値の「卒業後の進路希望を決めている」に「あてはまる」者と「あてはまらない」者の差を示している。

さらに、大学生活における就職意識の影響が限定的であるのに対して、「縁故」の影響は大きいものであった。「縁故」に恵まれると考える大学生は大学・専攻の選択では将来性を重視するとともに、学習、大学生活への取り組みに対して積極的であった。また、大学生の消極的な学習行動は曖昧な就職意識ではなく、就職における「縁故」の効用を肯定することによって促されていることが明らかになった。

第 6 章 地方大学における職業生涯教育

本章では職業生涯教育の実態と、大学生の就職意識や大学生活との関連を検討し、大学における就職支援の課題を提示した。質問紙調査の結果、職業生涯教育は形骸化しており、大学生の就職意識、または大学生活に対し有効に機能していないことが指摘された。

また、インタビューの結果からも、職業生涯教育の実施は形骸化しており、大学生と大学の就職指導係の両者がともに否定的にとらえていることが明らかになった。政策に応えるために、地方大学は、専門性のある教員など、職業生涯教育の実施に必要とされる条件が備えられていないまま、それを取り入れなければならなかった。また、大学生たちは、就職難は大学生に責任があるという前提で計画、実施されている職業生涯教育に対して、否定的な態度を示していた。就職指導係も、大学生の就職意識の「修正」を職業生涯教育の目的として捉えている一方、指導が大学生に受け入れられないことで自らの仕事に無力感を覚えていた。

本章はこれまで大学生の就職意識問題の対応策として評価されてきた職業生涯教育を、地方の事例をもとに批判的にとらえ直した。すなわち、大学生の就職意識を一方的に問題視することは、大学のキャリアサポートの形骸化、あるいは無効化を助長していた。

終章 地方大学における就職意識のゆくえ

以上の分析と検討から、本研究の結果は次のようにまとめられよう。

- ① 地方の大学生の就職意識についての調査は、従来指摘されてきた大学生の就職意識の問題と異なる結果を示した。地方の大学生は大都市や大手への就職よりも、福利厚生と将来性および職場環境を重視している。また、堅実な就職意識の一方、高い転職志向が指摘され

た。

- ② 就職意識および大学生生活の分析から、大学ランクのほか、「縁故」による影響も大きいことが指摘された。就職意識と大学生生活との関連が限定的であるのに対して、「縁故」に恵まれていると考える大学生は大胆かつ自由な就職態度を示し、大学生生活に積極的に取り組んでいる。
- ③ 大学の職業生涯教育に対する分析から、職業生涯教育の形骸化が指摘された。政府の要請に対応するために導入された職業生涯教育は、大学生の就職意識や大学生生活の実態と乖離していることが指摘された。

以上の結果を踏まえて、大学における就職指導および中国における大学生研究の在り方について示唆したい。

第一に、中国での大学生研究における「縁故」の重要性が指摘できた。大学生の就職意識および大学生生活が「縁故」によって左右されていることから、中国での大学生研究や階層研究における、「縁故」の重要性が指摘できる。したがって、今後は、「縁故」を用いて中国の大学生を研究することが必要であろう。

第二に、本研究は中国の不平等な社会構造、とくに大学生を取り巻く不平等に検討を迫ることになった。大学生の就職および大学生生活に対する家庭背景の影響を考慮した就職指導が必要だと考えられる。そのために、中国社会における「縁故」の文化的・社会的背景などという、階層に対する検討が求められる。

第三に、本研究では、大学生の就職意識の問題に対する従来の指摘の限界を明らかにし、就職意識のメカニズムに潜む問題に検討を迫った。中国の社会背景を踏まえたうえで大卒者の就職難問題を再検討することが必要である。

第四に、大学生の就職意識に対する修正を主な目的とする就職指導に潜む問題が指摘された。大学生の就職意識に対する従来の指摘は就職意識のメカニズムに潜む階層問題を無視しただけでなく、就職における不平等を助長し、就職に不利な大学生を社会的に排除することになる可能性が考えられる。

以上の考察を踏まえると、大学生の就職意識のみを問題視する従来の見方は、就職意識のメカニズムに潜む中国特有の階層問題から目を逸らし、大学生像を歪め、その結果、大学の就職指導の形骸化ないし無効化を助長してきたと考えられる。今後の大学での就職指導の在り方としては、これまで日本と中国で行われてきたような心理的なサポート中心ではなく、社会的背景を考慮した、多様な大学生に対応する個別の指導が必要だと指摘できる。

以上のように、本研究は大学生を取り巻く就職問題の捉え方に修正を迫っただけでなく、就職指導の課題に示唆を与えた。しかし、本研究で得られたのは地方の大学生を対象とした結果であり、中国全体の大学生事情を一般化したものではない。今後、さらに他の地方の事例を分析するとともに、大都市と地方の比較などを通して、多様な大学生像を提示し、大学生の就職意識の形成過程、および大学の就職指導を検討していきたい。

IV. 主要参考文献

<中国語文献>

陈成文・胡桂英, 2008, 「择业观念对大学毕业生就业的影响-基于 2007 届大学毕业生的实证研究」『高等教育研究』第 29 卷第 1 期, pp.46-52。

邓洁, 2004, 「家庭社会经济地位与大学生就业」『北京師範大学学报 (社会科学版)』3 期, pp.111-118。

冯晨静・张丽敏・葛超, 2010, 「试论促进大学生就业意识构建的途径」『河北农业大学学报』 vol.12, no.3, pp.333-334。

- 胡伟莉·黄华文,「读书无用论的反思:基于大学生就业难的视角」『成人教育』第2期,2010年,pp.76-77。
- 黄艳芹·夏丽洁,2005,「地方高校学生就业指导面临的问题及对策」『邢台学院学报』vol.20, no.2, pp.121-122。
- 赖德胜,1998「教育,劳动力市场与收入分配比例」『经济科学』第5期 pp.43-50。
- 赖德胜,2001「劳动力市场分割与大学生失业」『经济科学』第10期 pp.69-76。
- 廉思,2009,『蚁族:大学毕业生聚居村实录』广西师范大学出版社。
- 刘晓箏,2011,「新时期大学生就业意识探析」『河南财政税务高等专科学校学报』vol.25, no.2, pp.72-73。
- 马克思研究院 編,2012,『2012年中国大学生就職報告』中国大学生就職研究課,社会科学文献出版社。
- 杨绍文·郑杰,2003,「关于降低大学生就业期望值的思考」『北京教育』pp.51-53。
- 袁晓华,2007,「地方高校毕业生就业状况分析与对策」『集美大学学报』vol.8, no.1, pp.70-74。
- 岳昌君·文东茅·丁小浩,2004,「求职与起薪:高校毕业生就业竞争力的实证分析」『管理世界』第11期, pp.53-61。
- 张义明·刘志侃,2006,「大学生现代就业意识—高校就业指导的逻辑起点」,『贵州工业大学学报社会科学版』, pp.92-94。
- 张小紅,2006,「当代大学生学习动机现状与原因分析」『成都信息工程学院学报』第5期, pp.755-758。
- 赵海燕,2010,「大学生就业取向影响因素分析」,东北师范大学修士論文。
- 朱锦庆·黄金辉,2006,「大学生就业现状与观念的转变」『河北师范大学学报』,vol.29, no.2, pp.11-13。

<日本語文献>

- 池本淳一,2007,「大卒青年の就業問題とアスピレーション」『日中社会学研究』第15号, pp.91-109。
- 王傑,2005,「学部生の進路志向における家庭的背景の影響—中国の4大学を事例として—」『教育社会学研究』No.76, pp. 245-263。
- 荻谷剛彦,2001,『階層化日本と教育危機:不平等再生産から意欲格差社会(インセンティブ・ディバイド)へ』有信堂高文社。
- 韓美蘭,2009,「大学新卒者の就業行動およびその規定要因に関する実証分析」『経済学論究』第63巻第2号, pp.161-182。
- Coleman, James S. 1988, Social Capital in the Creation of Human Capital, American Journal of Sociology, 94:S95-S120.(=2006,金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司編『リーディングス ネットワーク論』,勁草書房)。
- 徐亜文·来島浩,2007,「中国における新規大学生卒業者の就職難の実態—山東省の事例を中心に—」『研究論叢.人文系学·社会科学』56(1/2), pp.77-105。
- 園田茂人,2001年,『現代中国の階層変動』中央大学出版部。
- 堀口正·大竹章友,2010,「中国·大学生就業活動中の社会的ネットワークの役割」『経済学論集』Vol.50, No.1・2, pp.129-146。
- 牧野篤,1995,『民は衣食足りて—アジアの成長センター·中国人の人づくりと教育—』総合行政出版。
- 馬志遠,1998,「現代中国の大卒者就職過程に関する実証的研究」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第38巻, pp.135-144。
- 丸川知雄,2002,『労働市場の地殻変動』名古屋大学出版会。
- 山田浩之,2010,「地方大学における学生の学習行動と学習意識—大学の学校化がもたらす学習の形骸化—」『比治山高等教育研究(3)』pp.37-48。
- 李敏,2011,『中国高等教育の拡大と大卒者就職難問題』広島大学出版会。